

論註他利利他の深義に就いて

小比賀保一

一

宗祖は教行信証の証卷尾に「宗師顯ハ示シ大悲往還ノ廻ヲ向ム「慇懃弘ニ宣シ他利利他深義ニ」ハという。この一段は曇鸞の釈功を嘆ぜられて、証卷の結文とするのであるから、「他利利他深義」は論註最後の要本釈下の他利利他積より出る言葉と見ねばならぬ。このことは古来の先輩が既に指摘する通りである。その論註の他利利他積を窺うに就いては、先学の既に研究しつくす所であるが、甚だ異説が多い。吾人の僅少な資料によっても、ただの二三ではない。しかも比較検討するときの説にも難がある。勿論いずれも立義者系統相統者が一丸となつて、一往來難を会通して居るが、吾人より見るとき、全く疑難氷解とはいいい難い感がある。今その一々について論及することは紙数制限のため不可能であるが、その例を示せば

(A)説は他利と利他とは一法の異称で、共に自利に対する言葉にて、仏の衆生利益行であるという。この説に対して一体の異名ならば生仏共に他利とも利他ともいわねばならぬ。然れば仏より言わば利他、衆生より言わば他利と

いう論註の釈文が解されぬと難ずる。それに対して、他利は自利行に随伴する任運自徳の行であって、しかも衆生が仏に利せられることを意味するから、衆生より言えば他利といい、利他は専ら衆生救済の志願に基づく化他行即ち作願化他の行であって、仏が衆生を利することを意味するから、仏より言えば利他というたのであると来難を会して居る。がしかし吾人よりいえばこの説はあまりにも「談有_二左右_一」「自利に対する目」という二に執じ過ぎた嫌いがある、論註の釈には素直でないように思われる。

(B)説は他利は從生向仏の名で、他に利せられるの意、即ち他(仏)が我(衆生)を利すること、又利他は從仏向生の名で、他を利するの意、即ち我(仏)が他(衆生)を利すること、立名差別ある故に「談有_二左右_一」というのであると立義する。この説に対して、所義の如くば他利と利他とは全く立言の左右にて、共に衆生を利する仏力を示して同義であるから「今將_レ談_二仏力_一是故以_二利他_一言之」の釈に契わぬ。又他利の他を仏とすること諸経論の造語に相違すと難ずる。それに対して難者は自利に対する目という義に執ずるが、今は然らず。他利と利他と反対して、要求其本の本が仏力なることを顯わす他利他積であることに注目せば、疑難氷解するであろうと来難を会して居る。がこの説も吾人より見れば、鸞師諸経論の造語を用うとも、その顯わす所は弥陀淨土教の独特義にあるから、同一に律すべきでないとする意は理解出来るも、諸経論の造語に違ふの難は消し難いのではないか。何となれば諸経論にその例なきは、鸞師の破天荒的断章取義的行爲とするか、という疑難がどうしても残るからである。

是の如く先輩の説を見るときどの説にも難がある、後学の者はその帰趣に迷わざるを得ない。ここに吾等の進むべき方向が問題となる。

論註他利他積を窺うについて、先ずその位置を心得る必要がある。他利他積は論註最後の利行満足章の問答料簡に明かす要本釈に述べられてある。利行満足章は五念門に対する五果門を明かし、因果対説して二利行成就即ち因果相応成就して仏果を得るとなす。自利利他の行が彼土に至りて成就することを顕わすから利行満足と名づけたのである。しかるにその仏果を成ずるについて、浄土論に「速得成就阿耨多羅三藐三菩提」という。ここに疑問がある。五念五果二利行成就の説相は漸次成就となつてある。又その五念門は上の起観生信の善男子善女人の行修として、その修相はきわめて苦難の行相となつてある。にもかかわらず「速得成就」と論主がいわれたのは何であろうかと。鸞師この疑問解消のために次に問答料簡せられる。

先ず設問して「有何因縁言速得成就阿耨多羅三藐三菩提」と天親の論意を問う。次にそれに答えて「論言修五門行以自利利他成就故」（以の一字論文になし）と。初めに論文を挙げて、五門行を修して自利利他成就するから、阿耨菩提を速得成就するというのが論意であると示す。しかしこれでは得の字は解明されたが速の字は解明されぬ。即ち前掲の疑問は未解である。鸞師ここに留意してその不審を解かんとするが要本釈である。その説相は「要求其本阿弥陀如来為増上縁」というて、衆生の二利具足成就は全く仏力に由ると示し、その仏力はどこから顕現するかということについて他利他積を施されて、仏の利他行こそ衆生をして二利成就せしむる仏力の発起点即ち根源なることを明かす。然らばその仏の利他行はいかように衆生に顕現するやというについて、「凡生彼淨土及彼菩薩人所起諸行皆縁阿弥陀如来本願力故」という。即ち仏力が利他行となつて発動するが、その利他行は本願力となつて衆生の二利を具足成就せしめて、仏果菩提を速得成就せしむるといい、次に三願的証して本願力の具体的なるものを出し、その一々に「得速証也」といい、それを押えて「以是而推他力為増上縁得不然乎」と結ぶ。この意は衆生往生の因果悉く仏力所成と示すのであるから、他力増上縁という縁は因に対する

ものではなく、因即縁の因縁合論である。故に鸞師は次に自力他力の相を相對して示し、それを結んで「遇哉後之学者聞^ニ他力可^ニ乘^ニ当^ニ生^ニ信心^ニ勿^ニ自局分^ニ也^一」というて要本釈を終えられてある。これが論註最後に施された問答料簡の様相である。さればこの問答料簡は鸞師の意ひとえに他力往生を示すより外なしというべきであろう。

これを要略せば問答料簡の当分は衆生が二利具足成就して仏果を速得成就することの理由を示すのであるが、その釈相は自力利他二利具足成就が仏果への絶対条件であるが、それを衆生の行相とする限りどうしても先の不審が解明出来ぬ。衆生が二利具足して仏果を速得成就するには其の本がある。即ち阿弥陀如来の利他行が本願力となつて、衆生の二利を具足成就せしめるからである。と明かすから、この問答料簡の一段は、一にも二にも阿弥陀如来の仏力が他力増上縁とはたらいいて、衆生を往生成仏せしむることを述べると知られる。故に全く他力往生という他力義を明かすと見ねばならぬ。

今の他利他釈は是の如き問答料簡の要本釈の中で、他力の根源が仏の利他行なるを顯わすために施されたのである。故にこの釈は衆生救済法とはたらく阿弥陀如来の仏力の発起点を示すとせねばならぬ。文中「今將^ニ談^ニ仏力^一是故^ニ以^ニ利他^一言^レ之^一當^レ知此意也^一」の言葉は深く味読すべきである。

三

他利他他の釈とは論註下(三十四丁左)に「他^ト利^ト之^ヲ与^ト利他^ト談有^ニ左右^ニ若^ラ自仏^ヲ而言^{ハバシク}宜^{ハバシク}言^ニ利他^一自衆生^ヲ而言^{ハバシク}宜^{ハバシク}言^ニ他利^一今將^ニ談^ニ仏力^一是故以^ニ利他^一言^レ之^一當^レ知此意也^一とあるのがそれである。

之とは次上の「覈^ニ求^ニ其本^ニ阿弥陀如来為^ニ増上縁^一」の為に応ず。他利、利他の言は仏教の伝灯に共に仏の衆生救済を顯わすからここに出す。談有^ニ左右^ニとは立言の相違ありという。若自等已下はその有^ニ左右^ニの由を示す。若自

仏。而。言。宜。利。他。は利他の言は從仏向生の名、自衆生而言宜利他は他利の言は從生向仏の名という。然れば鸞師の意は、利他は仏が他の衆生を利益すること、他利は衆生が他の仏に利益せしめられることとするを知るのである。さればこの他利と利他と対照せば談有左右となる。即ち利他は仏より、他利は衆生より立つ言葉で、その立言の場所は相違するも、その所顯は共に衆生の利益即ち自利利他成就にある。一の衆生の二利成就を仏より言わば利他、衆生より言わば他利とするから、他利と利他との關係は談有左右となる。所談の相違はあつても所顯の義は一であるから談有左右というたのである。「今將談仏力は是故以利他言之」は他利利他の積を結ぶ。今將談仏力は上の之を成ずる。その意は「要求其本阿陀陀如來為増上縁」の本と為の具体的相を示して、要求積中の他利利他積なることを顯わすのである。是故以利他言之は仏力を示すには利他の言がよいというて他利利他積を結する。當知此意也とは上の要求其本の言を承けてその宗を成ずるのである。

論註の文相を是の如く見るとき、鸞師の意は、利他の言によって仏力の能動的なるを示し、他利の言によって衆生の受動的なるを顯わすといえるのではないか。

これを要するにこの他利利他積は先きの「要求其本阿陀陀如來為増上縁」を承けて、その仏力の発起点を示す。しかも利他の言必ずしも仏力を談ずるには非ざるも、論主が「自利利他成就して仏果を速得成就す」というたことに著眼して、仏は元来自利利他成就ではないかと考え、要求其本というて、願生行者の自利利他成就を撰末歸本するために、利他の言を仏力を顯わすと取って、他利利他積を施されて、仏力が利他行とはたらいで、願生行者の自利利他を具足成就せしむる深義を顯わすのである。

すでに然れば他利利他の言は通仏教にあるけれども、鸞師使用の意は特異と言わねばならぬ。

論註他利利他積の文相をどう見るかで、その扱ひの義が分かれるのであろうが、吾人は上述の如く見るのが文相

に素直であると思う。

四

この論註他利利他釈を宗祖は証卷尾に「慇懃弘宣他利利他深義」というのであるが、その宗祖の意は如何なるものであろうか。これについて先ず宗祖は鸞師の教義をどう見て居たかを知る必要がある。高僧和讃曇鸞章の第十一、第十四、第十七首、及び行卷正信偈の曇鸞章等より見れば、鸞師の法門は他力往生を明かすといわれてある。而してこれが宗祖教義の根底となつてあることは、先学の指摘する所であり、行卷他力釈を見ても容易に知られる。宗祖は鸞師の法門を是の如く見た上で、今証卷に「慇懃弘宣他利利他深義」という。しかもこの言葉は次上の「宗師顯示大悲往還廻向」の文と一連して、証卷の結文とする。その意は先学もいう通り、証卷の結文には出すけれども、上教卷より下証卷に至る教行信証の四法が悉く如来摂化の顯現であり、他力廻向の法なることを示すのである。されば「慇懃弘宣他利利他深義」の言葉にその義ありといわねばならぬ。然らばどうしてそれが見えるかというに、他利利他深義は論註他利利他釈より立言するのであるが、宗祖が是の如くいわれる意は、既述の如く論註他利利他釈が覈本釈における仏力の発起点（根源）を仏の利他行なりと示すから、その義より取って、教行信証の四法が仏力所成なることを述ぶるにある。若し然らずは証卷の結文が解されぬ。されば宗祖が他利利他深義といわれたるを換言せば、他力の深義となる。即ち仏の利他行が発動して衆生を他力往生せしむるを、今宗祖が他利利他深義と出されたのであると思う。

そしてそれについて宗祖は「慇懃弘宣」という。ときにこの慇懃弘宣が如何なる意をもつかというに、他利利他の深義が既述の如きものと知らるれば、この慇懃弘宣はその他利利他の深義に対する鸞師能詮の功とせねばなら

ぬ。鸞師能詮の功とは論註所造の労苦を嘆ずるのであるから、慇懃の相は論註一部に種々の法門を明かされる鸞師の意といわねばならぬ。即ち一の釈言ではなく、一部始終にわたる釈意についた言葉であると思う。それを具体的に示されたのが、次上の顯ニ大悲往還廻向ニの句である。即ち論註一部始終に明かされる種々の法門をこの一句で総括されたのである。故に慇懃弘宣は鸞師が是の如くも苦心して、ひとえに他力義を示さんとする意をいわれたのであるから、慇懃弘宣は鸞師の釈功とすべきであろう。ここに吾人は

慇懃弘宣——能詮の釈功——論註所造

他利他深義——所詮の法門——他力往生

となると考える。而してこの兩者の關係は、慇懃の説相なくば他力の深義は弘宣され難く、仏力が発動して衆生の二利を具足せしめて、仏果を速得成就せしむることが如何に深義であるかは、鸞師の慇懃の説相がそれをよく顯わして居ると思うのである。

五

ここで問題となるは「論註はたして宗祖着眼の如きか」ということである。これについて先ず論註一部は他力往生を明かすということは、既に先学もいう通り、論註は最初に龍樹易行品の難易二道判を挙げて

難行道——唯是自力無ニ他力持ニ

易行道——乘ニ仏願力ニ仏力住持

と示し、その龍樹の意は二道あることをいうのではなく、他力易行道の乗すべきことを明かすと述べて、今この論註はその易行道の教義を祖述するぞと出し、最後の要本釈には三願的証して他力増上縁を明かして「愚哉後之学者聞ニ

他力可_レ乗_レ当_レ生_三信心_一勿_レ自局分也_二と結ばれる。されば論註は首尾に他力をもつて起結してある。これをもって論註一部を見れば、鸞師の意は唯だ他力往生を明かすの外なしといわねばならぬ。すでに然れば中間の所明に種々の法門を述ぶると雖も、皆悉くこの他力義を示すための施設というべきであらう。これを換言せば鸞師は浄土論を釈するに当り、論主の意が一心願生他力往生にあることを見ぬかれて、それを頭わさんがためにこの論註を製す、而して言葉をつくして種々の法門を述べられるが、鸞師の意は唯だ他力にある故に最初と最後に他力を出して、論註一部の帰結を知らしむると同時に浄土論の本意を明示するのである。これを要略せば鸞師論註所造の労苦は、ひとえに他力往生を明かすにありと知られるのである。

然らば鸞師はどこでその他力を知られたかというに、論註の上で明らかに他力を出されたのは最後の要本釈であることよりせば、浄土論最後の利行満足章の「速得成就阿耨多羅三藐三菩提」の言葉であるといわねばならぬが、実は偈文の不虚作住持功德の「観_三仏本願力_一遇_三無_三空過者_一能_レ令_三速_三満_三足_三功德_三大宝海_一」の所で他力を知られたのである。それは論註二カ所の不虚作住持功德釈（上二十六丁右）を見るときに首肯される。即ち論主が偈の最初に於いて一心願生を述べ、又最後に「普共_三諸衆生_一往_三生安樂国_一」と一切衆生に往生を勧められるは、この偈文の意は一切衆生に一心願生往生安樂国を勧むるものと見ねばならぬ。そしてその中間に不虚作住持功德を述べて、仏の本願力によって功德大宝海を速満足せしめられるというのであるから、この一心願生往生安樂国の因法は全く仏の本願力に由ることを示されるのである。ここに明らかに因の速が語られてある。これをもって論の最後の利行満足章を見ると、速得成就等といわれたは果の速なりと知ることが出来る。そしてこの果の速は偈の因の速の顕現したものであり、因果共に速なるが故に、一切衆生は論主と同じく、安樂国に往生して仏果を成ずることを得ると知られる。されば浄土論の所明は偈文も長行も帰する所は他力往生にありとなる。今鸞師は是の如き浄土論の所明につい

て、論主の本意を深く洞察され、論の所明は全く他力往生にありと見ぬかれて、それを釈するに及んで要本釈を施し、撰末帰本せられて他力義の真面目を発揮されるのである。さればこの他力増上縁の所明は、鸞師の特筆すべき釈功と嘆ぜられねばならぬと思う。

しかしてこの鸞師のいう他力義を可能ならしむる基本理念は、ただ浄土論がそうであるだけでは、首肯せしむること不可能である。そこに先学が既に指摘する通り、鸞師が四論学派の系統に属して、龍樹仏教の相依、縁起、因縁生という般若空の思想、即ち仏教の根本義の上に語られてあることによって初めて可能なるを知るのである。

六

宗祖はこの鸞師の指南に由って他力廻向説を主張されるのであるが、それを最も単的に語るものは、先学も指摘する通り信巻三心釈の機無、円成、廻施の釈相である。而して行巻他力釈の所明によれば、論註利行満足章によって他力廻向説を述べるといふ。そしてその意を具体的にに出されたのが証巻の結文である。所がここに問題がある。鸞師は他力増上縁というも、他力廻向とはいわぬ。況んや如来廻向の語などはどこにもない。これは如何に考うべきであろうか。又かりに鸞師の言葉がなくとも、文意が直ちに他力廻向と見えるならば、宗祖以前の道綽善導法然に於いて、すでに他力廻向がいた答である。しかるにそれが無いのはどう解すべきであろうか、ということである。

今思うにこの問題の解決に於いて注意すべきことは、宗祖が証巻の結文に語る意は、論註の釈言ではなく釈意によるということである。鸞師は浄土論を釈するに当り、論主の本意に立入り、論文の幽義を開顯して、一心願生、

他力往生こそ淨土論の究極なりと見ぬかれて、それを祖述せんとて論註一部を造る。そしてその最後の要本釈に他力増上縁の深義を述べるのである。その他力増上縁が因縁別論であつては、五念行がどこまでも衆生の修因となつて、問答料簡の疑問解消は成ぜられぬ。故にどうしても因縁合論の他力増上縁と見ねばならぬ。然れば他力増上縁と明かして疑問解消してある所に、仏の本願力が衆生の二利を具足成就せしめると知られる。然ればこの他力増上縁は、換言せば如来廻向、他力廻向にまで行つてあるとせねばならぬ。宗祖は鸞師の言葉を見て、そこまで徹底せられたから他力廻向説を主張されたのであると思う。されど鸞師の言葉にそれがなかったのは、この問答料簡で疑問解消と考えられたからで、そして鸞師をしてかくなさしめたのは、すでに不虛作住持功德釈によって因の速が明らかになつてあることによると、いうべきであらう。ここに宗祖が鸞師の言葉にはないが、この問答料簡で疑問解消と結してある所に、鸞師の意識以上の如来廻向、他力廻向の義が見られるから、他力廻向説を主張されたといわねばならぬ。故に宗祖の他力廻向説は深く論註の文意に徹して、鸞師の意識以上の深い意義を直視されたことよりの結果であると思うのである。

然らば宗祖以前の道綽、善導、法然等に見えなかったのが、宗祖にどうして見えたかというに、これは宗祖の立場がそうさせたというべきであらう。「他力廻向説は宗祖独特の如来観と衆生観とが思想的に結合した所に生ずる母胎がある」と先学が発表して居るが、その衆生観を成せるものは台嶺生活二十年の破綻の体験であることは、報恩講式（第一段真宗興行の徳を讃ず）嘆徳文、歎異鈔（第二条）等を対照するとき首肯せられるのである。又今一つは念仏教団彈圧を契機として、師匠法然の他力念仏の不廻向義を基礎づけねばならぬという、門下としての責任からであると思う。ここに「他力廻向説は宗祖御己証の法門」といわれることの妥当なるを知るのである。

七

すでに然れば鸞師の他利利他釈は他力増上縁の根源は仏の利他行なることを示し、宗祖はこの鸞師の指南によって証卷尾に語って他力廻向説を述ぶる。共に仏力が衆生をして他力往生せしむる義を顕わすのである。しかも宗祖によって初めて鸞師の本意が明確にされたのである。されば今日の宗学もこれを探求することを以て、その目的とすべきではなからうか。そしてそのための最重要事は文相を素直に読むこと、即ち「勿_レ自局分_二也」より外に考えようがないと吾人は思うのである。

(後記) この拙論は先学の指南によってようやく成ったのであるが、紙数制限のためそれを一々明示出来ないことをおわびし、ここに先学諸氏の皆様へ深甚の感謝を申上げる次第である。